使徒言行録
シリーズ～新約聖書入門～
広島弁訳新約聖書
ルカによる福音書の続編

・「テオフィロさま、わたしは先に第一巻（ルカによる福音書）を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。」1:1–2

・イエス様によってはじめられた全人類を救う神様の働きがどのように広められていったかを説明するために記された
使徒言行録のあらすじ

・聖霊が降り、弟子たちは大胆に福音を語り始める
・エルサレムに信じる人々の群れ（教会）が誕生する
・ステファノの殉教を機に迫害が起こる
・弟子たちは周辺地域へ福音を伝える
・異邦人にも福音を伝える
使徒言行録のあらすじ

- 迫害者であったパウロがクリスチャンになる
- アンティオキアで異邦人を中心とした教会が誕生する
- バルナバとパウロによる最初の伝道旅行①
- エルサレム会議
  - 異邦人クリスチャンにも律法を守らせるべきか
- パウロによる伝道旅行②③
- パウロ、囚人としてローマに送られる
使徒言行録15:36～18:23
～堀川寛による広島弁訳～

（広島弁訳の意味）（訳者の解説・蛇足）

しばらくして、バウロはパルナバに言った。
「おいで、こないだ（この前）イエス様の福音を伝えた町へもう一回行ってみよう。ほんの、あなたが（彼らが）どう思うか見て来ようやろう！パルナバは、マルコと呼ばれったヨハネも連れていきたいと思うった。はいじゃがバウロは、（こないだの伝道旅行の時に）パピフィリア州で勝手にいんしもうた（帰った）ようなもの（者）は、連れて行きしようかった。はいで二人の意見がはげしくつつかたけえ、結局別行動をおこすことになった。パルナバはマルコを連れてキプロス島に向かって歩き、バウロはシラスを連れて、主イエス様の恵みをゆだねられて出発したよ。はいで（陸路を行って）シリア州やリキリア州やさらりと回り、教会を励ましたと。

第16章
バウロは、デルベからリスストに行ったんじゃないが、そこに、信者になったユダヤ婦人の人で、ギリシア人の父親を持つ、テモテという弟子がおっこんよ。こんにちは（この人は）、リストとイコノノの仲間の間でえらぶ評判がえがかった。バウロは、このテモテを一緒になるべくて、そこで住んでいるユダヤ人の手前、ここに割礼（ユダヤ人の男性は全員割礼を受けた）を受けてさ。オデジャがギリシア人じゃないことを、みんなが知ったけえじゃ。バウロらはあっちこっちの町を回って、エルサレム会議で決まったことは、異邦人クリスチャンはユダヤ人の律法を守らなくても良いが、偶像に献けた肉には注意するように（守るように）を伝えるようにと伝えたよ。（バウロの訪問によって）教会の信仰が強められ、日ごとに人数が増えていったと。

それからパウロは（中部の）アジア州で御言葉を語るなを聖霊に禁じられたんで、（北部の）フリギア・ガラテヤ地方を通るにゃいけんよになった。ミシアの近くまで来て、ピピフィリア州に行こうと思うたら、イエス様の霊がこれを許してくれなかった。ほいのに、仕方がないけれど、ミシアを通ってトロアス（いす港町）まで来てしまったと思う。その時、バウロは怒った。一人のマケドニア人がバウロの前に立って、「マケドニ

州に渡ってきて、わしらを助けてつかあさい（下さい）」言うて懇願したんだ。バウロがこの怒を見たがるとき、わしらはすぐにマケドニアへ行くことにした。マケドニア人に福音を伝えるために、わしらは神様に召されたと確信したけえじゃ。

わしらはトロアスから船を乗り、サモトラケ島に寄って、翌日ネアポリスの港に着いた。ほいのに、マケドニア州一の町で、ローマの植民都市じゃったフリピに行き、その町に数日滞在することにした。安息日に町の門を出て、祈り場（会堂のない町でユダヤ人が集まっていった場所）があるらじょう思われた川岸に行ったのじゃ。ほいで、わしらもそこへ座って、集まったら婦人らに話しをしたんじゃ。そこに、ティアリティ市の大衆の商人で、ティアリティいう敬虔な婦人がおったんじゃないが、主が彼女を心の里でくれるにやったけえ、バウロの話しをよく聞き分けたって。ほいで、彼女も家族のもの（者）も信じて洗礼を受けたんじゃ。

そうと、「うち（私）をはんまのクリスチャンじゃないと、うちがた（うが家）で師ってつかあさい」言うて顔をけります、そうすることにしたんじゃ。
ところが真夜中、バウロとシラスは（そんなひどい目にあったのに）賛美を歌いながら、神様に祈りようになった。ほかの四人らは隠れろといったんじゃ。そこで突然、大地震が起こって、家屋の土台が揺れて、家の Ryder において家屋の中で生きたから、家屋の隅でまだ外れてるのだった。目を覚ました看守は、家屋の隅でまかない見守って、見守る人がまだ逃げ出してなかったと思いこんで、刀を使って自殺した。バウロは、「早く逃げなさい。戻らないでみなこの世に。」と言おうとしたんだんじゃない。看守は明かりを持ってこらせて家屋の中へ駆け込み、バウロとシラスを外に連れて出し、彼の前に震えながらひれ伏して言う。「先生がた、救われることはありませんようにねと後を言う。」二人は言った。「ときイネス様を信じなさい。」しかし、あんたもあんたの家族も救われるけん。看守が家の隅で全員を連れてきたけど、バウロはみなにイネス様の話を聞いて隠した。（ここまでがようやく）看守は、二人の打ち傷の手当てをして、自分の家で全員に洗濯を授けてもらえた。はいで、二人を自分の家に案内して食事を出し、家族をよそってほんのつめの神様を信じるようになったことを喜んだんだ。

次へ、長官らは下役を差し向け、「あんらを釈放せよ」と言われた。はいで、看守はバウロに、「長官が、先生が釈放せよと言う。覚えておきます。」そのことで自由の身です。安心して行って下さい。」と言った。ところが、バウロは下役をつかもと言って言う。「わしは市民権を持つ立派なローマ市民じゃ。それでも長官らは、正式な裁判もせんと、わしを公文の面前で頽倒し、囚人として連れて出させる銀星じゃろうが。」下役はこの言葉を長官らに報告した。長官たちは、二人がローマ帝国の市民権を弾圧することを聞いて震え上がり、飛んできてわびと書いて、二人を連れて出して、町から出て行ってくれるように頼んだんだ。牢を出た二人は、再びリディアの家に持って仲間に会い、みなを励ましてから出発した。

第 17 章

バウロとシラスは、アンフィポリスとアポロニアを通り、テサロニケに着いた。ここにはユダヤ人の会堂（シナゴーグ）があった。バウロはいつももやってるように、ユダヤ人の集まる会堂を行って、3回の安息日に行なって（旧約聖書をもとに論じよう）た。
パウロが、イエス様と復活について話し合った経緯。 Iniで、ビオはパウロをアレオバゴス（アテネの中心地）に連れて行き、こう言った。「おまえがしゃべりうる新しい教えがどんなものか、どう聞かれてくれんか。いなけない（奇妙な）ことを言いよるような気が、どうかね意味があるんかのよう。アテネの住民やその客を訪れる人々は、何でもええと手に新しいことを聞きつかったReservedジュ。パウロは、アレオバゴスの真名に立って言った。「アテネの皆さん。皆さんはどうか見てもなく、心を深く方じゃ思います。道が、あなた方が拝まれてもの（物）を見よったら、『名無しの神様』いな祭壇を見つけました。いしもやけ、あなた方が名前も知らんと拝みよろしくも教えてもはいでしょう。この世界とその中のすべてのものに造られた神様が、その方じゃ。この神様は地上万物の主（ぬし）じゃけ、人の手で造ったお宮さんかにやまりやせん。それに、何もいえるものんじゃけ、人間が世話せやいけない何かです。もしきらかい方にあると親しむといも достoにとらざる Üye下さるがけにこの神様にほけえ。神様は、ひとりの人からすべての民族を造りして、地上のあらゆる所に住まわせ、時間で土をし、地域をお決めになる。これは、人間に神様を求めさせたためや。誰でも一生懸命に探し求めまり、神様を探し当てることができる。神様はわしら一人一人から離れてもおっちゃいな。わしらはその神様のうちに生き、動き、存在しとるんじゃ。あなた方のうちの詩人も、『私はその子孫である』、言うとあるんじゃ。わしら（人間でさえ）神様の子孫なんじゃけ、まして神様自身を、人の手で造った金や銀や石の像にもかあいませ。神様は私たち人間の無知そして見透してくれるときたったら、今は、至る所で、あらゆる人々に、心を入れ替えよう命じとつれてじゃ。それから阿、神様がお立てになった一人のお方（イエス・キリスト）の義の業によって、この世界をお救いになり日を決めるたべらけじゃ。神様はこのお方を死亡者から復活させることで、それが確かなことじゃと証明し申した。「死者の復活の話しを聞くと、あるもん（者）はあが笑い、あるもんは、「その話しはまだ今度聞かなくてもうわ」、言うたんじゃ。パウロは（この反応に少し落胆して）その場を離れたらんじゃ。いじじゃが、パウロの話しを聞いて信仰に入ったらんもあった。その内に、アレオバゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという名前の女性、他にも何人かおったと。

第18章

その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。そこで、ボストン州出身のアキラいうユダヤ人と奥さんのプリスキラにあたって（出会い）、クラウディウス帝がユダヤ人をみなローマから追い出したけ、近ごろイタリアからきたとんじゃ。パウロはこの二人と（処）を訪れて、同じ仕事をし合ってくれ、それに（彼ら）の家に住み込んで、一緒に仕事をし合ったよ。その仕事は「テント作り」じゃった。パウロは安息日ごとに（ユダヤ人の）会堂で語り、ユダヤ人やギリシア人を説かせて興奮させた。シラスとテオドールがマケドニア州からやって来て、パウロは「（仕事を止めて）からもっぱら御言葉を語り、ユダヤ人に向かっては、イエス様が約束されたメッセージの一出来証言した。ほいじゃが、ユダヤ人らが反抗して、かばたれる（文句を言う）け、パウロは服の腰を払い落として言うたんじゃ。「おまえらの血は、おまえらの頭に降りかかわった。わしに責任がない。今からわしらは異邦人に伝える！パウロは会堂を出て、真の神様を信じるディオニシオ・ユスなど（異邦人の）人の家に行った。（いうのも）その家は会堂の隣じゃった。ユダヤ人である）会堂長のクリストが、何とそれあてて主イエス様を信じた。それに、コリントの人らもようけ（多く）パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けたよ。

ある晩のこと、主イエス様は幻の中でこう言うちゃった。「恐れず語り続けなさい。黙っちゃけん。わしがあなたと一緒にいる。あなたの声はわしを保証し切る。この町に、わしの民がようけ（大勢）おるけのう。パウロは（この言葉に意を固めて）1年6ヶ月コリントに住んで神様の言葉をみなに教えてたんじゃ。ところが、ガイオンがアカイア州の地方総監じゃったとき、ユダヤ人らが反乱を組んでパウロを追う、法廷に入れ遭ってたんじゃ。ほいへ、「こんなは（この人は）、わしらの法術に反するやり方で神を礼拝するように説いてまわりよん。言うたった、パウロが反論しようと思った時、ガイオンがユダヤ人に言った。「ユダヤ人よ、不法行為か悪質な犯罪ならおまえらの訴えを取り上げちゃらんこともないが、おまえらの言葉や名誉名前や法律や彼らの処分、自分たちで勝手にやってくれ。わしはあそばないか関係するつもりはないけ。」ほいへ、みなを法廷から追い出した。ところが、（気がスマン）連中は、会堂長のホルピス（グリスボの後継者）をひっかまえて、法廷の前でポポコにした。総督の
ガリオンは見て見ぬふりをした。
それでもパウロはあきらめずにコリントにしばら
留まったが、コリントでできた仲間に別れを告
げて、シリア州に向けて出発した。ブリスキラとアキ
ラも一緒に言った。パウロは親しい事がなかった(野っ
た)んで、ケンケアイで髪を剃った。エフェソに立
ち寄った折りに、パウロは二人を置いて自分一人で
ユダヤ人の会堂に行って、ユダヤ人と論じおうた
(合った)。その人たちはもうくらいと(少し)おってくれ
るよう頼んだが、パウロは断り、「神様の御心じゃっ
たら、また戻って来ますけえ」とって約束して、エフ
ェソから船出た。

カイサリアに着いて、教会に報告するためにエル
サレムに上り、それからアンティオキアに戻った。パ
ウロはしばらくそこでおったんじゃが、また直ぐに旅
支度をして、ガラテヤやフリギアの地方に出かけて
いき、弟子らを励ましたんじゃ。